



「八代に伝わる和紙の文化を守ろう」。12月5日、八代市の宮地公民館で、「暮らしの中の宮地和紙」と題した活動の発表会が開かれました。主催は「宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会」（磯田節子代表）。地域住民約30人と崇城大学芸術学部デザイン学科（原田和典学科長）の学生4人が参加。宮地和紙を現代の生活雑貨に使ったデザインを発表しました。 文・松石友里香 写真・松永育美

“宮地和紙”に 新たな命を吹き込もう！

大学生が和紙を身近な雑貨にアレンジ



宮地和紙の継承に興味を持つ会社員や主婦、元紙漉き職人ら地域住民約30人が、学生の発表を聞ききました。



亀甲模様が浮き彫りになった和紙（右は3Dプリンターで作った型枠）



和紙の原材料の一つ「コウゾ」。繊維が長く、強いため、耐久性に優れており、封筒や便せん、他、地元八代で卒業証書に使われています



「国指定重要無形民俗文化財になった妙見祭と絡ませられないか」など、地域に根差した開発を要望する声が上がりました



会場の壁には、去年、磯田さんと学生たちが地元の人から聞いた地域の変化などが掲示されていました



宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会代表・磯田さん



（左から）崇城大学デザイン学科の嶋村裕さん、財前早希さん、有働門香さん、鶴保崇さん



できたー！



報告会の後は、学生も地元の人たちと一緒に、宮地和紙で伝統的な折形の書袋などを作りました

「和紙とひとくくりで捉える人たちに、丁寧に作られているから」とその宮地和紙の丈夫さと温もりを知るきっかけになるような、オンラインワンのデザインを考え直したいと鶴さん。財前さんは、実際に商品化するときは、加藤家や細川家の御用和紙として重宝されたと、いった宮地和紙の歴史を紹介するパンフレットや目を引くロゴを制作するなどしてブランドを確立させたいと話しました。報告会終了後「もっとブランドアップの勉強をして、3月の最終報告会では、地元の人に応援してもらえそうな物を作りたい」と意気込む大学生たち。最終報告会は、3月26日、27日、八代市厚生会館で行われる予定です。

柔らかい手触りを生かす
カイロケースなどに展開

また、設計図を元に立体を造形する機器3Dプリンターで型枠を作り、ぬらした和紙を挟んで柄を浮き彫りにするエンボス加工の技術も考えました。柄は八代らしく、妙見祭のガメ、にちなんで亀甲の模様など数種類。フックカバーなどにしたいと提案しました。

地元の人の声を
デザインにつなげたい

学生の力を借りて地元の歴史や文化の魅力をアピールしていきたいと参加した宮地町在住の中村富美美さん(60)。「他の和紙との差別化を図ることが大切。目で宮地和紙だと分かるような工夫もほしい」と要望しました。

宮地和紙の復興に向けて

宮地和紙の名前の由来となっている八代市宮地町は、妙見祭（国指定重要無形民俗文化財）で知られる八代神社界わい。1600年の関ヶ原合戦後、加藤家に預けられた柳川藩主立花宗成を慕って肥後に移り住んだ、柳川藩御用紙すきの新左衛門が、宮地の水無川沿いで紙すきを始めたことから、この地で和紙が盛んに作られるようになりました。宮地和紙は加藤家や細川家へ献上される御用和紙として作られました。「コウゾ」という植物の皮の内側の繊維を原料とし、強くて美しい優れた性質を持っています。明治初期まで100軒以上もあった手すき和紙職人ですが、洋紙の普及で後継者が減り、現在は八代神社のそばに作業場を構える宮田寛さん(81)がわりわいしているほか、新左衛門の子孫の矢壁政幸さん(71)が残っています。昨年、宮地和紙の歴史と衰退を知った、元熊本高等専門学校八代キャンパス教授の磯田節子さん(65)は、「若い感覚で宮地和紙に新しい命を吹き込み、地元や観光客に知ってもらいたい」と「宮地紙漉きの里を次世代につなぐ研究会」を立ち上げました。